Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1993, Vol. 40, 159 − 173.

中年期女性の発達とロールシャッハ・テスト

── 不安を訴えた2事例の検討 ──

星　野　和　実[1)]

Ⅰ. 問題と目的

Erikson, E. H. (1950) は，ライフサイクルの視点から，人の心理社会的な発達は生涯に渡って続くものであるとしている。個体発達分化の図式（Epigenetic Scheme）を提示し，人の一生を8つの発達段階に分ける中で，それぞれの段階において，心理社会的な発達の課題と危機を設定している。それらに対してどのように対処し，課題と危機をともに経験しつつ，如何に課題の達成と危機的状況のバランスを取っていくかが，個人に問われることとなる。

また，Mahler, M. S. (1975) は，乳幼児期の母子関係の観察から，子どもの発達として，分離・個体化説を唱えている。子どもは，正常な自閉期，正常な共生期を経て，分離・個体化を迎えると言う。こうしたプロセスは乳幼児期のみでなく，青年期にも起こるとし（Blos, P. : 1967, Brandt, D. E. : 1977），青年期は第2の分離・個体化期と見做されている。その後，第3の分離・個体化期として，中年期を捉える視点が提示されるようになってきた。

岡本（1985）は，ライフサイクルにおける発達的危機期として，乳幼児期，青年期，中年期を挙げている。いずれも，自我同一性の形成に関して，特に重要な分岐点となる時期である。すなわち，乳幼児期に最初の同一性の感覚を獲得し，青年期には自我同一性を確立する。そして，中年期では自我同一性の再体制化が行われるとし，そのプロセスを「第1段階：身体感覚の変化の認識にともなう危機期，第2段階：自分の再吟味と再方向づけへの模索期，第3段階：軌道修正・軌道転換期（自分と対象との関係の変化），第4段階：自我同一性再確定期」と，記述している。

さて，Erikson によれば，成人後期における，心理社会的発達の課題と危機は，『生殖性 対 停滞』である。『生殖性』は，自分が生み出した人やものについて関心を示し，責任をもってそれらを育て導くことに反映される。子どもを生み育てることや，次の世代と相互的にかかわること，及び広い意味で創造的なものを作り出すことと言える。こうしたことを，職場，家族等の社会的環境との相互作用において，互いの自己を活性化させつつ，実現していくのである。

また，それは異なる世代とのかかわりを，より緊密に力動的に結びつけるものでもある。「生殖性の本質である，世話すること，養うこと，維持することの経験は，各人生段階をまとめてひとつの人生のサイクルを創り出し，新しく生まれた者の中にサイクルの始まりを再創造する。これらの同じ経験が，ライフサイクルの連続をまとめて世代的サイクルを創り出し，最終的にはその世代に生命を与えた世代とその生命を育む責任のある世代の三代を結びつける」(Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q., 1986)。

一方，『停滞』は次の世代の世話や，他者からの欲求に応えず，自己満足のためのみにエネルギーを費やし，心理社会的成長が滞っていることを示している。人生の有限性が見通せる段階に至って，自分の限界を認めつつ，自分の死後も続いていく世界の営みに対して，個人的な寄与を行うことへ転換していくことが必要とされる。

『生殖性 対 停滞』への取り組みは，具体的には子育てや，職場での創造的なかかわりの中で展開される。また，この年代では年老いた自分の両親の世話や，結婚後新たにできた拡大家族（義父母など）との関係形成も要請される。子育ても含めて，これらの作業では自分の両親との関係の問い直しが求められる。

従って，成人後期においては，個人間での世代を越えたかかわりをするとともに，個人内においても，個人の世代とも言える発達段階に重層的にかかわることになるのである。

このように，成人後期には『生殖性』の課題に直面することとなり，この取り組みの中で自己の再確立が問題となる。その際に現在の発達段階のみでなく，乳幼児期や青年期といった，それ以前の発達段階も焦点化される

1）名古屋大学大学院研究生

と言える。そのため，成人後期のみでなく，乳幼児期からさかのぼって，発達を検討することが不可欠である。また，子どもとの関係と同時に，自身の両親との関係も見直すことになるため，個人を取り巻く対象関係をつぶさに見ていくことが求められる。

さらに，現代女性においては，仕事，結婚，養育をめぐって，様々なコースを選ぶことが可能になりつつある。しかし，その一方で，家庭，職場，社会など多くの要因から，主体的な選択に困難を伴うことも確かに存在する。このような状況下で，女性の発達を見る際には，多様なライフコースを視野に入れて，コースごとに詳細に分析する必要があると思われる。

そこで本研究では，成人後期に不安を訴えて心理治療機関に来所した，２人の女性の事例を対象として，第一に乳児期からこれまでの発達のプロセスを検討する。今回は特に，20歳代で比較的長く職業生活に従事しつつも，30歳代で結婚及び出産を契機に，それぞれの思いを抱えて，専業主婦となった事例を取り上げる。第二に，成人後期の発達という視点から，ロールシャッハ・テストの分析を試みることとする。これらの分析を通して，中年女性の成人後期の発達課題の様相を検討する。

Ⅱ．事例の検討

１．事例Ａ

１）事例の概要

なお，事例のプライバシー尊重のため，内容に支障のない程度に，記述の変更を加えたことをご了承願いたい。

⑴　**クライエント（以下，Cl と略す）**：Ａ子（40歳。女性。主婦）

⑵　**主訴及び主症状**：不眠。不安感。４年前に第２子出産後から，「ふわーっとした不安」（「　」は，cl の言葉である）が浮かぶようになる。目の病気のため，失明するのではないかという不安や，闇への不安が起こるようになる。

⑶　**家族歴**：５人きょうだい（３男２女）の末子。夫と結婚後，夫の両親と５年間同居するが，折り合いが悪いため別居し，現在は Cl，夫（39歳。会社員。「やさしすぎる」性格），２人の子ども（４歳と，小学校１年生の男の子）の４人家族である。

父親（78歳。製造業。「気性が激しい」）に対して，Cl は憎しみや恐れを抱くが，母親（72歳。主婦）は，Cl にとって安心できる存在と言う。

⑷　**生育歴**：幼少時は，男の子と同様に遊び，喧嘩もよくしたが，中学校入学後は大人しくなる。卒業後は看護婦になりたかったが，両親に反対されて諦め，高校に進学する。家庭では両親の仲が悪かったため，Cl は外で荒れていたと言う。高卒後就職するも，20回ほど転職する。20歳で目の病気が判明する。その後製造会社に勤務し，「男の人と同等に」働く。20～30回見合いをした後，29歳で夫と知り合って結婚し，第一子出産時に退職する。「結婚後も仕事をしていたかった。私は男に産まれたかった」。36歳から現症状があるため，２，３の病院（内科，精神科）にかかる。Ｃ病院（当時，筆者の実習先であった）を紹介されて受診する。

⑸　**処　置**：Ｃ病院で精神科医の診察後，心理療法の適応として依頼がある。主治医の診察と並行して，筆者が心理療法を行うことになる。

２）治療経過

筆者が，15回の面接（198X年９月～198X＋１年５月）を行い，以後中断した事例である。第１回（以後，面接の回については＃１と記す）から＃５は週１回，＃６～＃15は隔週に１回の面接（１回約50分）を行った。

＃１～＃６，「不安が浮かんできてひどい時になると死にたくなる…。目の病気で37歳の時，医者にすぐに失明するか，だんだん失明するかどちらかと言われてから，失明するんじゃないか，闇への不安が起こるようになった」（＃１）。最近，運動を始めたと言う。

＃７～＃12，不安やイライラは一進一退の様子である。「４月になったら子どもが幼稚園に行く。そしたら自分の時間が持てる。（結婚後）８年経ってやっと家の外に出れる。牢屋に閉じ込められているようなものだった。地獄のような日々でも，よく子どもを育ててこられた…。でも子どもが自分から離れていく寂しさも少しありますね」（＃９）。

＃13～＃15，結婚，子育てについて語る。「何で結婚したんだろうと思います。結婚しなきゃよかった。子ども産まなきゃよかった。時々，何もかも放り出してひとりでどこかへ行ってみたい…。子どもだけは一人前にしないかんと思って…。頑張ってるけどもう疲れちゃった…。でも頑張ってないと落ち込んじゃう」（＃13）。「先週は死ぬことばかり考えてた…。子どもがいると外へ出れない。がんじがらめ。自由が欲しい。外へ出て働きたい」（＃14）。「今でも不安感はあるけど，でも先のこと考えて不安になってたから，今日１日精一杯生きればいいと思うようになった。…子どもが幼稚園に入って，自分のやりたいことができる。５月になったらと指折り数えて待ってたのに，実際になってみるとすっと気持ちが引いちゃうのは不思議ですね。家建てるのでも，欲しいと思っているのが，実際に手に入れてみるとこんなもんかと思う…。子どもが小さ

いから育てないかんと思ってがんばってます。子どもが小さいからこんなにがんばれるんかしらとも思う」(#15)。

3）発達をふりかえって

ここでは，乳児期からこれまでの発達のプロセスを検討する。なお，Newman, B. M. & Newman, P. R. (1984) に従い，青年期を13歳～22歳（青年前期：13歳～17歳，青年後期：18歳～22歳），成人前期を23歳～34歳，成人後期を35歳～60歳とする。

(1) 乳児期から児童期

Cl は幼少時から，姉と性格的に合わず，兄とともに過ごした。父母の仲は悪く，母親には安心感，父親には敵意を抱いていた。こうした中で，Cl は女の子としてよりも，“男の子のように”成長した。父親に対して否定的な感情の一方で，同一視の側面もあると言える。

すなわち，Cl は父親を目指して，①“男の子のようになりたい”と思い，②“男の子として，他の男性（父親，兄など）に負けない”という気持ちをもっていた。一方で，母親を見て，③“女の子だから，男の子になれない”とわかり，母親が父親へ向けた気持ちを受けて④“女の子として男性に負けない“と思ったり，⑤“男性への恐れ”や，⑥“男性への好意”があった。父親に対しては，意識的には④⑤のように反抗心や恐れをもつが，⑥の肯定的な感情は，（母親を含めた三者関係もあってか）意識されていない。

また，母親は極めて良い対象像であり，Cl の支持的な存在であるが，性役割モデルとしてあまり機能していないことを考えると，母子感はそれほど安定した絆ではなく，③のような怒りや失望もあることが推測される。いずれにしても，父母への複雑な感情が考えられる。

(2) 青年期

中学校入学後は，看護婦を志望するが，両親の反対によって諦め，不本意に進学する。それは，高校時代の荒れた生活から見ても，Cl にとって大きな挫折であったと思われる。看護婦を指向することによって，女性として，職業人としての自己を形成しようとしたと考えられるが，それは敵対していた父親ばかりでなく，母親にも支持されず，閉ざされることになった。高卒後は，目の病気を境にして転職を繰り返し，なかなか職業にコミットできないでいた。

(3) 成人前期

その後，父親の仕事とつながる職種において，仕事の楽しさを知り，打ち込むようになる。20代を通じて，職業人としての自己を確立したと考えられる。ここで，Cl は「男性と同等に」仕事をするようになり，前述の①②③のような，“男の子として，あるいは女の子として男性に負けない”というあり方を続ける。

Cl にとって，20代はこうした青年期からの自己確立の課題が中心であった。一方，成人前期に重要となる異性とのかかわりは，どのようであっただろうか。Cl の場合，異性関係は「見合いを20～30回」というコミットの仕方であり，Cl が主体的に選んだ他者との間の密接な関係としては面接で語られていない。

その後，29歳で夫と知り合う。仕事は，第1子出産時に辞めることになる。Cl は，結婚相手として，激しい性格の父親とは異なる対象を求めていた。夫は「やさしくて暖かく包んでくれる人」と，Cl の理想に叶う対象であったと述べている。一方で，「働くのが好きでたまらなくて，結婚するときももっとしていたかった。年とったし，結婚しなきゃいけない」と，仕事への強い執着が見られる。また，女性ゆえに結婚に関して，年齢という社会的制約が強いことから，Cl の女性であることに対する怒りと諦めも伺える。

まとめると，Cl は前述の⑥のような，男性との肯定的な関係の形成や，支配―服従，対抗というあり方でない，男性とのつながりを求めていたと考えられる。夫という対象を得て，特定の異性関係における『親密性』形成の取り組みを展開していったのである。しかし，結婚を成就させることが，それまで仕事を通じて築いてきた自己を手放すことなり，強いアンビバレンツも見られる。

(4) 成人後期

36歳で第2子を出産する。これを契機に，不安が浮かぶようになり，その症状は面接時（40歳）まで続いている。「子どもが手を離れたら，仕事を始めたい… 子どももひとりにしようと思ったけど，夫が望んだので2人めを産んだけど」。ここからは，Cl が退職について不本意な思いを強めていることと，第2子出産を Cl は望んでおらず，それは仕事への復帰を遅らせるものと捉えていたことが知られる。また，第1子は幼稚園入園にさしかかっており，対外的にも母親役割を求められたと思われる。さらに，これに先立って，義父母との別居も重なる。

夫婦関係では，結婚，出産により退職を余儀なくされたことをめぐって，夫への怒りが高まっていた。夫は，それまで精力的であった Cl を，家に閉じ込める存在と見做されていただろう。また，義父母との折り合いの悪い時にも，Cl の支えにならなかった夫を見て，「やさしすぎて，頼りない人」と夫像が変化していった。最初の印象が肯定的な面が強調されていたこともあり，日常生活で出会った夫の様々な側面に失意も抱いていたと思われる。現実の夫像に直面する中で，夫との関係

における『親密性』の問い直しを迫られていたと考えられる。

『生殖性』においては，子どもを生み育てることに向いつつも，それにコミットしきれないClの姿が浮上する。Clにとっては，子育てよりも仕事の領域で『生殖性』を展開させたかったと思われる。また，この時期の重要な課題の1つである，祖父母の世話についても円滑ではなかった。実父母の世話を気がかりにしつつも，父親との敵対関係により，適正なかかわりを見出せていない。義父母との関係も悪く，年長の世代を世話する機能を自己に統合できていなかったと言える。このように，Clは『生殖性』を達成しかねて，『停滞』へ陥りかけていたと考えられる。

ここで，失明への不安という症状の心理的意味を考えてみよう。Clの場合，目の病気が実際にあるのだが，“光を失う不安”は，上述のような成人後期における課題と危機のアンバランスと密接に関連していると思われる。ひいては，加齢に伴う身体変化，人生後半への転換や，人生の限界の認識，死への不安ともつながっていることが推測される。

また，Clの場合，女性としての自己を受容することは，男の子としての自分を（ある程度）諦めることになった。そしつ，仕事をやめて，子どもに向うことは，Clの内的な少年性が閉ざされることであったとも考えられる。同時に，女性であること，母親になることで，未成熟な女の子，娘としての自己を失うことでもあったのだろう。一方で，更年期の女性特有の身体変化の開始を感じて，生理的に女性であることの終焉を予期したこともあったのであろう。心理的に女性であることを受け入れる前に，女性としての身体が失われることにも動揺していたのではなかろうか。このように，様々な意味で，青年期に確立した自己の見直しや，女性としての自己が問われている。女性としての自己の成熟と関連して，成人前期の発達課題もあらためて，問題になっており，それは『生殖性』に不可欠なものだと考えられる。

以上のように，Clにとっては様々な意味が，症状に付与されていると思われる。成人後期にある今，それ以前の発達段階を振り返り，身体的にも心理的にも，これらの課題に，どのように対処するかが，Clの今後の人生を問うものであり，症状を通して直面していると考えられる。

2．事例B

1）事例の概要

(1) **クライエント**：B子。47歳（インテーク時）。主婦。

(2) **主訴及び主症状**：イライラ。不安。細かいことが気になる。不眠。衝動買い。

(3) **家族歴**：6人きょうだい（2男4女）の末子。父親は，4，5年前に死去（当時82歳）。Clは父親について，「母親には気難しかった。叱られたこともあるが，そんなに怖いイメージはない」と言う。母親（84歳）に関しては，「長男の嫁だったこともあり，忍耐強かった。取り越し苦労をよくしていた」と言う。現在は，Cl，夫（58歳。自営業。15年前に先妻と離婚し，Clとは再婚。「よくできた人」），2人の子ども（小学校2年生の女児，小学校6年生の男児），舅（83歳），姑（82歳）と同居している。同じ敷地内に，先妻の息子（30歳。家業の手伝い）の，一家（嫁，4人の子ども）が住む。

(4) **生育歴**：小，中学校では，運動は苦手だが勉強は頑張っていた。あまり社交的でなかったが，2，3人の友人はいた。中学校卒業後，家の経済的な事情やClの学力から，高校進学を諦め，看護学校へ進む。看護学校卒業後は幾つかの病院を変わりつつ，準看護婦として働く。32歳時に，同僚から夫を紹介され見合結婚をする。2年前から舅や姑，義理の息子のことでイライラするため，D病院（当時，筆者の非常勤先であった）を受診する。

(5) **処　置**：精神科医の初診後，心理療法の適応として，筆者が面接を担当する。

2）治療経過

20回（199X年11月～199X＋1年5月）の面接（1回約30分）を行い，筆者の退職により中断した事例である。Clの言葉を「　」，筆者の言葉を＜　＞で記す。

＃1～＃7，舅や姑，先妻の息子との確執や，それがもとでの家出等を堰を切ったように話す。「義理の息子は，私のことどう思っているのかと，365日思う。結婚当初，息子は“せっかく親父とうまくやっているのに入ってきた”と言った。それ以来，やっぱり自分は受け入れられていない！悔しいやら，辛いやら」（＃2）。「自分の子どもじゃない子を育てるのが，同じように愛情かけるのが難しいと本当にわかった」（＃7）。

＃8～＃12，「姑にカチンときて，ポッポッと言ってしまう。もう少しソフトに言えたらと思うが，自分でも興奮してくる。自分の子ども以外は，本当にかわいいと思えない。息子も私をお母さんと思っていない。私も義理として育てている。（親戚が息子の嫁を頼ることが多く）私は一生懸命やってきたのに，その度に悔しい思いしてきた！」（＃8）。＃9，息子の家族に出ていってほしいことを，涙ながらに訴える。「（家出から戻ったのは）子どもの学校を思い遣って辛うじて思い止まった。これから先，やりきれなくて…。夫に息子の話をいつもしてもうっとおしいと思うし，夫にとって息子は本当の

子どもだし…」。#12,「(姑達が息子の嫁でなく) 何もかも私に任せてほしい」と激す。

#14～#20, Cl の強い訴えに夫が動き，息子一家は新しい住居の完成を待って，家を出ることになる。「複雑な気持ちです…。でも本音はほっとした。いずれは自分達の家族だけで暮らしたい」(#14)。「この3か月間にいろんなことがあった。一気に膿を出してしまった。この頃は落ち着いている」(#15)。#17, 夫に対する不満を語る。「こちらから聞くと答えるけど，夫の方から心を開いて言わない」。#18,「先のことを取り越し苦労することはあるけど，いつまでも考えててもしょうがない。今みたいな感じでいい」。#20,「(姑達は) 私に全面的に頼ってほしい。そうしたら頼られてるなと思う。どうして認めてもらえない。それが悔しい。夫ははっきり言えば，姑の味方です」<姑に頼られること…家族の一員として実感がある>「それを望んでいる」。

3) 発達をふりかえって

(1) 乳幼児期から児童期

Clの場合，現在の家族や舅，姑との関係で切迫した状況にあった。そのため，面接において，Cl の実の父母やきょうだいとの関係はほとんど語られず，こうした関係について明確に把握することはできていない。わずかに話された父母像から，父母との関係を推測してみると，以下のようになる。

父母ともに Cl と密接な関係としては，述べられていない。むしろ，父母の夫婦関係の印象の方が強く，それとの対比でClと父母間の関係を提示している。Cl の目から見た夫婦関係は，気難しい父親と，「長男の嫁」として忍耐強く仕える母親であった。Cl は，父親から叱られた経験を挙げるが，母親に対するほど Cl には辛くあたっていなかったとして，「怖い対象」であったことを否定している。

Cl にとって父母は，家の長としての父親と，嫁として仕える母親であり，“家”という意識の強いものであった。父親は，厳しいけれど，子どもには愛情を示すこともある存在だったのだろうか。母親に Cl は同情を寄せており，嫁としての大変さをよく感じ取っている (あまり，母親と Cl のかかわりは語られない)。そうした観点で見れば，母親を困らせる父親に対して，若干の怒りもあったのかもしれない。

(2) 青年期

運動が苦手な Cl は，小，中学校を通して勉強に力を入れる。しかし，高校進学に際しては，家の経済的な事情と学力不足から，進学の希望を諦める。両親は就職を勧めたが，Cl はその職業を好まず，家を離れ，看護学校へ通うことになる。第一志望には破れたが，自分の好きでないことはやらないという意志を通して，看護婦の道を選んだのであった。特に，看護婦を選んだ積極的な理由は語られていないが，Cl にとって主体的な職業の選択であり，職業を通じての自己形成の開始であった。同時に，親からの出立でもあった。

(3) 成人前期

いくつかの病院を変わりつつ，看護婦として働く。そのプロセスにおいて，「制服を着ると，血液でも便でも汚いと思わない」等ど，看護婦として職業意識を固めていた。一方では，「看護婦に向いているか」と適性を自問することも多かった。また，「患者さんからは，やさしいと言われていたが，本当にやさしいかどうか」等と，職業人としての自己と，職業以外での自己とのズレを感じることもあった。

異性とのかかわりについては，特定の異性関係でのコミットは見られない。何回もお見合いをするが，「自分のことは棚に上げて，相手の条件を気にして」，成就には至っていない。Cl にとっての思い出の異性関係は，中学時代の初恋であり，現在もそれを鮮やかに記憶しており，少女のように初々しく語るのである。

その後，32歳時に夫と見合いで知り合う。夫に対しては，「誠実そうないい印象」をもち，再婚，思春期の先妻の息子，義父母との同居といった，夫をめぐる状況も「全く気にもなら」ず，「職業柄，義父母ともうまくやっていけるという自負心があった」。両親の反対も押し切って，結婚する。同時に，看護婦を辞めたが，それに対する迷いはなかった。

まとめると，20代は職業を通しての自己形成に重点が置かれていたと思われる。また，職業柄，病んだ人を対象として，“自己を犠牲にして他者に尽くすこと”“世話をすること”に，仕事を通してかかわっていたと考えられる。しかし，自分の選択した職業の適性について葛藤を抱き，勤務先を転々とする等，必ずしも仕事にコミットできていた訳ではない。特定の異性との関係は周辺的であったが，30代初めに結婚に至ったことで，夫との関係において，『親密性』形成の途についたと思われる。この段階は，Cl にとって，“働くこと”から“愛すること”が中心となった，移行期であったと考えられる。

(4) 成人後期

結婚後，Cl は「長男の嫁」として，自営業を営む社長の妻として，親類や従業員の中で自分が位置づけられるように努力した。そうした役割の獲得は，まずまずの成果を上げたようであった。しかし，義理の息子との確執は，結婚当初からあり，息子から「一度もお母さんと呼ばれない」と，不満や寂しさを述べている。たとえ，

義理であっても母親として息子とのかかわりを作ろうとしていたが，困難を伴っていた。

しかし，数年前に息子が結婚し，配偶者を得て，子どもも設けて，家庭を作るプロセスでは，Clの側から見ると，子の出立を経験していたとも推測される。また，Clに対して新たに祖母という役割が付与され，それにも戸惑いがあったのかもしれない。特に，Clの発症の2年前は，孫が幼稚園に入園し，対外的にも祖母としての役割を求められることになったのであろう。

実の子どもに対しては，3，4年前に男児が登校拒否気味になったり，女児にClの否定的な面を見てイライラする面もあるが，基本的に母親として愛情をもっていると思われる。発症との関連で言えば，女児の小学校入学，男児の登校拒否傾向からの回復と，いっそう対外的にも母親としての責任を求められたと考えられる。このように，社会的にも母親の役割を身につけることを必要とされ，子育てが現在進行中である一方で，孫に対しては新たな祖母の役割も付加されて，役割の混乱もあったのかもしれない。

義父母との関係については，円滑とは言えない。特に，息子の結婚後は，いっそう状況は厳しくなった。義父母と息子の配偶者との仲のよさを目のあたりにし，「長男の嫁」の座が脅かされ，Clの不安が高まるようになった。そうした中で，Clを十分に支えない，夫に対する不満も表れ始める。一方，実父母との関係は，就職，結婚を通しての行き違いから，それほど緊密ではなかった。

まとめると，夫婦関係における『親密性』については，夫像の修正を迫られ，現実の夫との関係を問い直されている。

『生殖性』については，子どもを生み育てることにコミットしようとする姿勢は認められる。ただ，家族関係の難しさもあり十分ではない。祖父母の世話を求めつつも，その機能を発揮できていない。

Clの場合，「嫁」としての意識が強く，「母親」としては困難さを伴いやすい。実母の同一視であろうが，母親モデルとしてはやや弱かったと思われる。それを補うように，職業で得た「世話」の機能を，家族においても発揮しようとしたと思われる。しかし，看護婦としてのあり方を，そのまま家庭生活に持ち込むことも難しかった。このように，青年期に確立した自己の見直しも浮上していると言える。

Ⅲ．ロールシャッハ・テストの検討

ここでは，2事例について，自我機能の水準を明らかにするとともに，成人後期の発達の視点から，ロールシャッハ・テストの分析を行うこととする。ロールシャッハ・テストの分析では特に，前節で重要と見做された，以下の視点から見ていく。すなわち，① 対象関係，② 自己像，③“生み育てること”と，女性としての自己に関するプロセスである。

なお，治療経過中のロールシャッハ・テストの実施時期は，事例Aが＃6，事例Bが＃7であり，筆者が各事例に対して個別に行った。スコアリングは，名古屋大学式技法に則り，通常のスコアの他に，感情カテゴリー及び思考・言語カテゴリーも記した（表1，2）。

1．事例A

1）自我機能の水準

F％＝0％，F＋％＝0％，R＋％＝50％と，現実検討力は豊かではない。FC：（CF＋C）＝0：4から，外的統制の不十分さが伺える。外的な情緒的刺激に対して反応しやすく，そうした場合には知覚が曖昧になって，客観的な現実把握が困難になる。M：FM＝1：2，M：（FM＋m）＝1：4からは内的統制について不十分であると言える。

主観的な見方が強く，個人的な経験を持ち出して反応の説明づけをしたり，恣意的な修飾を行いがちである。そうした傾向は，自由反応段階よりも質疑段階で表れやすい。

情緒的には，陰影図版には陰うつな気分，二色色彩図版には不安と敵意，多色彩図版には快的な感情を向けているが，いずれも強い調子のものである。特に，Ⅰ図からⅦ図までの抑うつ的な感情と，Ⅷ図からⅩ図までの軽躁的な感情のギャップが著しく，否認や分裂といった低次の防衛機制も見受けられる。

以上のことから，自我機能の水準としては，神経症水準ではおさまりきらず，境界例水準であると考えられる。

2）中年期の発達の視点から

(1) 対象関係

ここでは，父親像と母親像を取り上げ，最後に全体的な対象関係について考察する。父親像については，Clが選んだ父親イメージ・カードに加えて，一般的に父親カードとされているⅣ図も扱うこととする。母親像でも，同様にClの指摘した母親イメージ・カードとともに，一般的な母親カードであるⅦ図を取り上げる。また，まとめとして，全カードの人間反応や人間運動反応にも焦点をあて，全体的な対象関係のあり方を考察する。

表1　事例Aのロールシャッハ・テストのプロトコル

I (7")①蝶々みたいなガみたいに見えますね。(28")	①こういうのがガの羽で，広がりがそういうふうに見えたんですけど<ガ>ガってこんなような感じの色ですもんね。 [∧ W FC'+ A P N definiteness, perplexity]
II (26") これ何だろう。 何に見える？ ①何か，血っていうことが浮かんできますね(44")	①お産した後の感じを想像しましたね。その後ぱーっと血が出ますでしょ。その時の女性の陰部<血>こういう，ぱーっと血が赤くなっている感じ<陰部>子ども産む時，子宮が開きますでしょ，子どもの頭ぐらいに。それが真ん中(DS5)で。子どもの出た後の汚れた感じで。 [∧ W mF−・CF・C'F Atf・Sex・Bl Hha・Bso・Adis perplexity, personal experience]
III (14") ①骸骨が2人向き合って，何か火の玉が飛んでるような感じですね，まわりをうろうろと。(45")	①何か骨のような感じで，死んだ人間みたいで。まわりに火の玉が飛んでいて，暗い感じがします<骸骨>骨のような感じに見える。頭も。これ，もうー。 [∧ W M+・mF・C'F H/・Fi・Death Hh・Athr・Agl definiteness]
IV (9") ①怪獣みたいに見えますね。子どもがいつも見ている怪獣みたいな，悪魔みたいな。(44")	①これが足で，これが顔で。こういうのが子どものテレビ・マンガに出てくるもんですから<悪魔>怪獣の中の悪魔みたいな黒い，襲ってくるような感じ。 [∧ W FM・FC'+ A/ Athr・Dch fluid, utilization for illustration]
V (1") ①コウモリに見えます。(11")	①これが羽で，コウモリってこんな感じに見えますね。コウモリが夕方っていうか，もう暗くなってから飛んでいるような<暗くなってから>暗い感じ，黒い感じで描いてあるから。 [∧ W FM・FC'+ A P Agl definiteness]
VI (18") ①これは何かしら。何かからだの中のはらわたのような気がします。悪い部分をレントゲンで撮影したみたいな。(56")	①よく私ね，胃カメラのんで，レントゲン撮ったりするもんだから，それから想像して。悪い部分，暗いとこ撮るんじゃないかなと判断して<はらわた>これが中心の背骨で，これが(D5+5)胃の一部のような。 [∧ W FY− Atf・Xray・Disease Bb・Bf・Bdi definiteness, personal experience]
VII (5") ①これは雲，空の雲。空がかげってきた時の，今にも雨が降りそうに見えます。(39")	①暗い感じで，もくもくと今にも雨が降りそうな感じですね。暗い感じが，雲のような感じで。 [∧ W YF+ Cl Agl・Adis overelaboration]
VIII (5") ①春，花が咲き始めたような感じのあれですね。(27")	①この色合いから，なんとなく。これから花が咲く春の途中。これから花が咲くっていうんじゃなくて，花が咲いた途中，春ちょっと過ぎた頃。色合いから感じますね。 [∧ W CF−・(Cysm) Abs・Flo Aev・Pnat fluid, vagueness, overelaboration]
IX (3") ①花がぱーっと咲いた感じですね。(18")	①このオレンジの感じが入っているから，夏近い，ぱーっとした感じに見えますね。もう，咲き乱れる感じ。 [∧ W CF−Flo Abal・Pnat overdefiniteness, vagueness]
X (12") ①これもやっぱり春の感じがします。(28")	①黄色，淡い感じの色。水色もみんな淡い感じで，春のような感じがします。 [∧ W Csym− Abs Aev・Pnat vagueness]

Tot.R = 10	Rej. = 0	W : M = 10 : 1	A% = 20%
W% = 100%	D%,Dd%,d% = 0%	P = 2(P%=20%)	F% = 0%
F+% = 0%	R+% = 50%	M : ΣC = 1 : 4.5	M : FM = 1 : 2
M:(FM+m)=1 : 4	(FM+m) : (FT+TF+C') = 4 : 5		FC : (CF+C) = 0 : 4
VIII・IX・X/R% = 30%			

Most Like Card	: X	「柔かい，ゆったりした，落ち着いた感じ。」
Most Dislike Card	: VI	「病気という感じのイメージだから。」
Mother Image Card	: X	「やさしい，あったかい感じ。」
Father Image Card	: IV	「明るい感じがしないし，ぞっとするような感じもあるし，逃げ出したくなるような感じもある。」
Self Image Card	: IX	「激しいところ。」
感　想：		「自分の今の置かれている状況が出てくるんじゃないかな。」

① 父親像

Clが選んだ父親イメージ・カードは，Ⅳ図であり，これは一般的にも父親カードとされている図版である。父親について，Clは『ぞっとする，逃げだしたくなる感じ』と印象を述べ，Ⅳ図の反応も「怪獣」［怪獣の中の悪魔みたいな，黒い襲ってくるような感じ］（「　」はロールシャッハ・テストでの反応，［　］は質疑段階における言葉）である。

このように，父親像は脅威的で原始的な対象像として反映されている。Clの父親に対する嫌悪感や恐怖感が，極めて強いことが知られる。情緒的に巻き込まれ，父親との適正な心理的距離が取りにくいことが伺える。

② 母親像

Clの選んだ母親イメージ・カードは，Ⅹ図であり，これは最も好きなカードでもある。母親への印象や，Ⅹ図の反応「春」［柔らかい，やさしい感じ］も，肯定的である。しかし，Clを圧倒するような手応えのある父親像とは対照的に，ここでの反応は知覚が曖昧であり，対象が漠然としている。また，一般的な母親カードであるⅦ図を見ると，「雲。空がかげってきた時の，今にも雨が降りそう」［暗い感じ］という反応である。Ⅹ図で言語化された母親の印象とは異なり，不安感情に覆われている。Ⅶ図では，人間反応が見られることが多いが，Clの場合は人間反応は出せず，拡散的な反応になっている。

Clに意識化されている母親像は，基本的にはやさしい肯定的な母親像である。しかし，対象としてははっきりしておらず，どこか掴みどころのない存在であるとも推測される。また，そうした存在としての母親に対する不安感は，Split Offされている。

③ まとめ

人間反応はなく非現実的人間反応が，1つあるのみであり，これは唯一の運動反応でもある。「骸骨が2人向き合って… 火の玉が飛んでる…」［死んだ人間みたい…］（Ⅲ図）では，人間を想起しているものの，生命は失われており，2人の積極的なつながりは見られない。感情カテゴリーからは，敵意と恐怖感に満ちていることが明らかである。

ここからは，生き生きとした，相互的なかかわりは見られず，対象関係の困難さが指摘できる。強烈な否定的感情の表出の結果，脱生命化された対象関係の一面を伺わせるものである。こうしたあり方は，日常生活における父親との関係や，義理の父母との関係にもつながることが推測される。

(2) 自己像

自己像は，Clの選択した自己イメージ・カードから検討する。また，父親及び母親のイメージ・カードとの関係についても分析する。

Clの選んだ自己イメージ・カードは，Ⅸ図である。Ⅸ図の反応は，「花がぱーっと咲いた」［夏近い。咲き乱れる感じ］で，Clの性格的な激しさと重ねている。「花」は，形態よりも色で把握されている。母親イメージ・カードの反応である，「春。花が咲き始め…」と比較しても，Clの激しさが伺える。しかし，「花」はその開花の様子は異なるものの，母親イメージ・カードの反応と重なっている。

先に述べたように，母親には肯定的な感情を意識しており，それをもとに母親に同一視して自己を形成したことが伺える。また，女性としての自己を開花させようとの姿勢も見られる。しかし，［咲き乱れる］に表されるように，過剰なほどに女性性を提示しているものの，（母親イメージ・カードと同様に）知覚が曖昧である。どんな形態の花がどのように咲いているかという，その対象ははっきりしない。女性的な内容の反応を産出しつつも，その内実は乏しく明確でないことが伺える。従って，母親をモデルに女性としての自己形成を目指したものの，女性としての自己は拡散的で，成熟していないと考えられる。

(3) “生み育てること”と，女性としての自己に関するプロセス

ここでは，“生み育てること”と女性としての自己に関して，そのプロセスという観点から，継列的な分析を試みる。

Ⅱ図では，「血」［お産した後。子どもの出た後の汚れた感じ］と反応を出している。この反応からは，Clにとって出産は汚れであり，身体を傷つけられた感じが顕著である。女性として，あるいは母親としての喜びや，生命をはぐくむ希望は見られず，むしろ出産に対する違和感や，母親や子どもへの怒りが推測される。Ⅲ図では，形態の把握が可能になる。しかし，反応は「骸骨」であり，生きた人間ではない。

Ⅳ図では，形態水準の保たれた反応である。「怪獣。子どもがいつも見ている怪獣」からは父親像とともに，子ども（男の子）への恐怖心が伺える。Ⅴ図では平凡反応で対処するが，Ⅵ図では形態水準が低下している。性カードでもあるⅥ図では，性へのなじめなさが見られる。Ⅳ図からⅦ図では，陰うつな気分が覆い，性カードを経て，Ⅶ図では形態の把握が二次的である。Ⅷ図からⅩ図では，一転して肯定的な感情が表出され，女性的な内容の反応だが，いずれも知覚は曖昧である。

まとめると，Ⅱ図で身体を傷つけて出産を経験したのち，Ⅲ図ではClの内的な死（娘としての自分や，男の

子としての自分の死）が推測される。Ⅳ図で，成長する子どもに父親を重ねて恐れており，子どもを生み育てることに対して喜びを見出せないでいる。Ⅵ図では，第2子の妊娠・出産やそれに伴う不安とも見て取れる。あるいは，性的な問題も指摘でき，夫との関係における不適応も考えられる。Ⅷ図からⅩ図では，女性として，母親としての自己の開花を快的な感情で描きつつも，内実ははっきりしない。

このように，成人後期の発達課題である『生殖性 対 停滞』に対する，Clのコミットのあり方が，ロールシャッハ・テストの継列的な分析において，いっそう明らかにすることができた。また同時に，成人前期の『親密性 対 孤立』の問題も，これに不可欠なものとしてかかわってくると考えられる。

2．事例B

1）自我機能の水準

F%＝35%，F＋%＝50%，R＋%＝71%から，基本的には，知覚は適正であり，現実検討力もある程度備わっている。現実吟味が一時的に弱まっても，常識的な対応によって回復することが可能である。自己表出や行動に際しては不全不安が高く，しきりに他者に保証を求めつつも，状況を支配しようとする動きが強い。また，反応において“自分が見た”ということは棚上げされ，他者が“そう言うようにと言ったので”という理由にすり替えられて，責任転嫁をすることが多い。

外的統制については，FC：(CF＋C)＝0：0から，外的な情緒的刺激に極めて回避的，抑制的である。一方，内的統制は，M：FM＝3：5，M：(FM＋m)＝3：5から，十全でないと言える。特に，内的，外的なストレスが高まると，外界から引きこもり，自分の不安は意識化されずに，恐怖や怒りとして体験されやすいと思われる。

そのような場合には，自己を揺さ振る刺激についての言語化もやや困難になり，対象に対して主観的な感情によって意味づけをしたり，内的な心の揺れ動きを抱えきれずに露呈することになる。

以上のことから，自我機能の水準としては，神経症水準であると考えられる。

2）中年期の発達の視点から

(1) 対象関係

① 父親像

父親イメージ・カードについて，Clは選択していない。父親からClが叱られた経験を話すものの，父親との関係についてはっきりとした印象を述べない。むしろ，父親と母親の関係の難しさを強調している。父親とのかかわりは，希薄なものだったのであろうか。一般的な父親カードであるⅣ図を見てみると，「動物のクマの毛皮」である。ここでは，材質反応であり，愛情欲求が指摘できる。一方で，感情カテゴリーからは敵意も伺える。

これらから，Clは材質を知覚し言語化する能力を備えており，父親に対して否定的な気持ちを持ちつつも，肯定的な感情も抱いていたと推測される。

② 母親像

Clの選んだ母親イメージ・カードは，Ⅵ図である。Ⅵ図の反応は，「エビを開いて天プラにしたような…エビでなくても，魚を開いて天プラにしたの…」である。感情カテゴリーからは，快的な口愛感情が指摘できる。一方，形態水準としてはマイナスであり，客観的な現実把握は不十分である。一般的な母親カードであるⅦ図では，「女の子が… 2人で踊ってる」［幼い女の子］という反応である。やや子どもっぽい側面もあるが，肯定的な女性像である。

母親イメージ・カードの印象として，Clは『母親というと，強いて言えば食べることにつながる』と述べ，家や父親に仕え，忍耐強い母親と捉えている。

基本的にはやや退行的ではあるが，快感情を抱いていると思われる。しかし，「強いて言えば」との言葉や，Ⅵ図の形態水準の低さからは，母親との関係がそれほど緊密でないことも推測される。また，生活の営みである家事と直結した母親像であり，女性性の成熟の観点から見ると，ややClに物足りない面もあったのかもしれない。

③ まとめ

人間運動反応は3つ産出されており，共感的な対象関係を形成する能力が認められる。「2人の人がふざけてる」［ダンスしている…道化師］（Ⅱ図），「女の子がダンスしてる」（Ⅶ図），「バイキンが暴れ回っている」（Ⅹ図：動物の擬人的な運動反応）である。Ⅶ図とⅩ図は，最も好きなカードにも選択されている。

基本的には，向い合った肯定的な対象関係を築く能力は備わっていると思われる。しかし，感情カテゴリーからはやや軽蔑的な感情や，時として攻撃的な感情も見られることから，一見ユーモアに包んだ中にも否定的な感情が認められ，対象関係のアンビバレンツや不安定さが指摘される。特に，Clは［道化師］に見られるように，自分の感情を適切に表出しつつ，相互的で快的な対象関係を形成するにはまだ課題があり，潜在的な関係形成能力は十分に生かされていないと思われる。

表2　事例Bのロールシャッハ・テストのプロトコル

I　この答えはある程度時間決まっているんですか<No>別に時間はないんですよね。(20") ①骨盤のようにも見えますし,	①結局, 左右にこう広がったところがそう見えるんですけど。[∧ W F− Atb Bb question for instruction]
②あるいはまた, こうもりとも見えますし,	②あと, こうもりも言ったかしらん。この羽を広げてるようなの。<こうもり>なんとなく黒いから, 余計そう思うのかも。[∧ W FM・FC'+ A P N perplexity]
③蝶々みたいにも見えますし。(1'01")	③これでしたかね。ここ目で, 触角っていうか。羽の感じが。今は蝶々よりもこうもりの方が強い。蝶々を否定してもいい。[∧ W F+ A N apology, denial]
II (6") ①人がふざけているような感じ。2人の人がふざけてる。それしかありませんね	①これ頭でね, 帽子かぶってね, 膝と膝合わせてダンスしているような感じ。道化師っていうか<帽子>尖ったような, 毛糸か何かの帽子をかぶっとるような。[∧ W M+ H・Cg・Rec P Dcl・Prec modified response, apology]
②蝶々みたいにも見える。正解は教えてもらえないですか。(1'54")	②何となく, 羽をパタパタしとるような。でも, 最初見た時よりも, 人がふざけてるというイメージの方が強くて。[∨ D4 FM+ A N apology, denial, irrelevant association]
III (10") ①昆虫に見えるんですね。トンボの目とか, カブト虫とか, ハエとか。(51")	①目と口と前足がこういうふうで(身振り)。昆虫とかが多いですね。そういうふうに意識して描いてあるのかもしれませんけど。どう見ても, これは花には見えませんわねー。[∧ dr F+ Ad Adis apology, irrelevant association, hesitation in decision]
IV (39") ①何に見えるかと, 敢えて言えと言うなら言いますが。動物のクマの毛皮, ムートンみたいなの。ボサボサッとした。(1'48")	①こういう毛の感じが, 毛皮の感じ。これが手で足で開いた感じ(身振り)。大きなクマを連想するんですよね<ボサボサッとした>ぺたっと平らじゃないでしょう。つるっとした感じじゃないですもんね。[∧ W FT+ Aob P Hsm apology, perplexity]
V (8") ①蝶々に見えます	①羽で, これ角っていうか, 触角ありますね。[∨ W F+ A P N]
②こうもりとか。蝶々とか, 羽のあるものに見えるんですね。(1'00")	②何となくね, 黒くて, 羽開いたのが, こうもりのイメージ。[∧ W FM・FC'+ A N apology]
VI (35") ①わからないけど強いてと言われるなら, エビを開いて天プラにしたようなのありますね。エビでなくても魚の開いて天プラにしたの。(2'02")	①エビフライのようなね。しっぽで, 身で。エビでなくても, お魚のイワシとか。ここ取れば(D2両側を隠す), 見えますね[∨ W F− Fd Por apology, hesitation in decision, perplexity]
VII (39") (カードを離して見る) ①女の子がやっぱり, 2人で踊ってるような感じかな。ダンスしてる。(1'03")	①これ顔でね(あくび)。これスカートっていうか, ちょっと手がこう(身振り)。[∧ W M+ H・Cg Pch] Add. ①これないと(D2+2除く), 犬がすわっとるようなイメージ。でも, 顔があるからやっぱり, 幼い女の子<犬>これ耳で同じのが2匹。左右対称で。これがあくまでもない場合ね。[∧ W FM+ A N apology, exactness limitation]
VIII (38") (カードを遠ざけて見る) 特に連想するものはないですね, これからは。(59")	(あくび)<今見たら>今見て仮に, もし何か言えって言えばどうしても言えって言えば, Add. ① 女性の骨盤っていうか, 内臓の中, 卵巣っていうか。でもちょっと違いますね<女性の骨盤>最初に骨盤のイメージありましたので。左右対称だから。骨盤の中に卵巣が<骨盤>格好が。これが子宮で卵巣がくっついてるでしょ。何も連想しないと言った方が正しいですけど。[∧ W F− Atb・Atf Bs apology, impotence, blot relation]
IX (51") (カードを遠ざけて見る) 特に浮かばないですね(小声で)。(1'04")	<今見たら>Add. ① 竜。さっきもそういうイメージ浮かんだんだけど, まあ言わなくていいかなと思って言わなかったんですけど。竜が火を吹いて踊っとるかなっていうイメージ<火を吹いて>火? まあ, 竜っていうと火を吹くもんっていうイメージがあるからかしら。これが火に見えたから。やっぱり竜かな。[∧ D1+1 FM+ A・Fi Hh・Athr apology, autistic logic]
X (50") (カードを遠ざけて見る) ①テレビのコマーシャルの虫歯のバイキン。ヤリもって, 暴れ回っているよう。うじゃうじゃとそこら中にいるよう。(2'21")	①虫歯とか水虫とか, マンガとかヤリもってあるでしょう。3種類のバイキン。目に見えるんですよね, この辺が。ああいうバイキンはちょっと形がいびつで, 動物に見えるっていうか。これ皆, 左右対称でしょう。鏡置いて左右対称に。こうやって描いたんですかね, 私ちょっと考えたんですけど。[∧ D1+3+4 M'+ A/ Hh・Athr・Adis perplexity, utilization for illustration, irrelevant association]

Tot.R = 14+3	Rej. = 2 (VIII, IX)	W : M = 9 : 1	A% = 53%
W% = 71%	D% = 24%	d% = 0%	Dd% = 5%
P = 4(P% = 24%)	F% = 35%	F+% = 50%	R+% = 71%
M:ΣC = 3 : 0	(FM+m):(FT+TF+C') = 5 : 2		M : FM = 3 : 5
M:(FM+m) = 3:5	FC:(CF+C) = 0:0	VIII・IX・X/ R% = 18%	

Most Like Card	: VII	「かわいい感じ。」(X「ユーモアのある感じ。」)
Most Dislike Card	: III, V	「蝶々や昆虫は嫌い。」
Mother Image Card	: VI	「母親というと, 強いて挙げれば食べることにつながる。」
Father Image Card	: なし	「母親には気難しかったが, 子どもにはあまり…。叱られたイメージはあるが, そんな怖いイメージはない。」
Self Image Card	: なし	「嫌いなものを取れと言われるならあるが, 自分のイメージはわからない。」
感　想:		「イメージすることが難しい。似たものが次々と出てくるから, 集中心が欠ける。黒ばかりで, X図が真中にあったら」。

(2) 自己像

自己イメージ・カードは，『嫌いなものと言われればあるが，自分のイメージはわからない』と選んでいない。最も嫌いなカードには，Ⅲ図とⅤ図を挙げており，「蝶々や昆虫は嫌い」と理由を述べている。「蝶々」の反応は，Ⅴ図の他にⅠ図とⅡ図でも見られるが，いずれも質疑段階で否定されている。また，Ⅲ図では質疑段階で［花には見えませんわね］と言っている。筆者は検査当時は気づかなかったが，Cl は［花］を見ていた可能性が考えられる。このように，「蝶々」「花」など女性的な内容の反応は産出されても，ことごとく否定されることになる。なお，参考に最も好きなカードを見るとⅦ図であり，母親カードにつながる。

以上のことから，母親に肯定的な感情を抱きつつ，母親に同一視して女性としての自己の形成を試みたことが推測される。女性性の成熟としては，母親はモデルとしてその内実は必ずしも豊かでなかったとも考えられる。Cl は，女性性にまつわるものを意識化したり言語化してもすぐに否定したり，そうしたものをどう自分の中で醸成させていくのかについても，すべを身につけていなかったと思われる。［幼い女の子］像はあっても，十分な発達を遂げられず，女性としての自己像は不明確であったと思われる。

(3) "生み育てること"と，女性としての自己に関するプロセス

Ⅰ図では，「骨盤」「こうもり」「蝶々」という3つの反応を出している。身体反応を第1反応として産出した後は，第2反応では黒色を知覚してやや陰うつな気持ちになっている。さらに第3反応では先にも記したように，「蝶々」を否定している。ここからは，Cl が子どもを出産した後，母親として，女性としての自己に目覚めかけるが，それを肯定しきれない様子が推測される。

Ⅱ図では「人がふざけている」と運動反応を出し，肯定的な対象関係への努力が認められる。Ⅲ図では，平凡反応である人間反応は見られていない。Ⅱ図からⅢ図では，赤色は回避され，「蝶々」（Ⅱ図－②），「花」（Ⅲ図）といった女性的は反応は産出されるものの，すぐに否定されている。

陰影図版に入ると，Ⅳ図，Ⅵ図，Ⅶ図では反応時間が遅れがちである。また，「敢えて言えとなら言いますが」（Ⅳ図），「強いて何に見えるかと言われるなら」（Ⅵ図）と，自己の不安を隠そうとして，他者に責任を転嫁しつつ答える姿勢が目立っている。一般的な父親カードであるⅣ図では材質反応にまとめ，Ⅵ図では母親イメージを想起しつつ，形態水準としては低下している。その後，一般的な母親カードのⅦ図では形態水準を回復させ，幼いながらも肯定的な女性像を見出している。

基本的に，愛情欲求を知覚し得るのだが，同時に不安も喚起され，そうした傾向は母親に関して表れやすいとも考えられる。しかし，Ⅳ図からⅦ図では，愛情に関して葛藤を持ちつつも，父親に暖かな接触を求め，母親にも口愛的な欲求を見出しつつ，成熟へ向けて女性としての自己の成長の過程が認められる。

多色彩図版であるⅧ図とⅨ図では，反応拒否になっているが，後に付加反応を産出している。これらの図版では，反応時間が遅れていることや，［さっきもそういうイメージ浮かんだけど］（Ⅸ図）等の質疑段階での言葉から，自由反応段階で既に反応を形成していたが，表出がためらわれたことが伺える。Ⅷ図の付加反応では，［女性の骨盤…卵巣…子宮］を見て，形態水準を低下させている。Cl 自身，Ⅰ図の「骨盤」という反応と関連づけており，Ⅰ図，Ⅷ図でのこれらの反応は，女性として，母親として経験した第1子，第2子の妊娠・出産を想起させる。感情カテゴリーからは，性的適応の問題が指摘でき，異性とのつながりに関心を寄せつつも，それは積極的な対象関係の形成としては表れていない。また，子どもを生み育てることへの肯定的なイメージとしても，明確には認められ難い。Ⅸ図の付加反応では，形態水準は回復し，Ⅹ図では（動物の擬似的な）人間運動も出せている。多色彩図版では，色彩をかなり気にしながらも，色彩を言語化し，反応に組み込むには至っていない。また，Ⅷ図を経たⅨ図，Ⅹ図では，ユーモアの中にも敵意感情の強い対象関係が描かれている。

まとめると，Ⅰ図の「骨盤」反応を第1子出産と捉えるならば，Ⅰ図からⅢ図では，女性性を時に意識しつつ否定していた Cl の姿が伺える。しかし，Ⅳ図からⅦ図では不安を抱えつつも，愛情欲求を見出し，生活を営む母親をモデルとして（Ⅵ図），幼い女性としての自己を成長させようとしていた（Ⅶ図）。しかし，第2子出産時には（Ⅷ図），夫婦関係の適応の問題が浮上するとともに，再び女性として，母親としての自己や，子どもを生み育てることの問題に直面することになったのであろう。第2子出産以降の対象関係は，それ以前のものと比較すると，攻撃性が強まっており，Cl を取り巻く対象関係の困難さが伺える。しかし，基本的には対人的な関心やかかわりへの欲求は強く，肯定的な対象関係のイメージも存在している。従って，今後はどのように"生み育てること"を自己の中に統合し，子ども，夫，家族とのかかわりを展開していくかに，Cl のコミットのあり方が試されると考えられる。

IV. 考　察

ここに提示した2人の中年期女性の事例は，①20代を通して職業にコミットし，②30歳前後で結婚に至り，③結婚及び出産を機に仕事を辞め，④成人後期に不安を訴えたものである。2事例は，ともに結婚及び出産を契機に退職して家庭に入ったが，20代での職業生活が長く，かつその間異性との親密な関係は展開していなかったので，いずれも（実の）子どもは，幼児期あるいは児童期にある。そのため，子どもが全て青年期以上の発達を遂げ，親から出立して子育てを終了したとの経験は，まだしていない。

これらの事例は，岡本（1985）の「自我同一性再体制化のプロセス」に従えば，第1段階の「身体感覚の変化の認識に伴う危機期」にあると考えられる。この段階は，「体力の衰えをはじめとする身体感覚の変化に伴う自我同一性の基盤の動揺と時間的展望のせばまりによる生産性の危機，および老いと死への不安が特徴的」とされる。事例A，Bともに，身体変化や女性特有の生理的変調，及びそれへのとまどいを面接の中で訴えている。

この2事例の発達の道程について，共通の特徴としては以下のことが挙げられる。成人前期の前半は，仕事を通した自己の確立に重点が置かれており，親密な異性との関係は周辺的であった。その後，30歳前後で結婚し，夫との関係における『親密性』の形成に移行していくのである。

成人後期には，仕事を辞めて家庭に入った2事例にとって，『生殖性』の重要な側面である子育てにコミットすることが求められるのだが，これにつまづく。また，子どもと対面する中で，青年期に確立した自己の見直しや，女性としての自己の再検討が焦点化されてくる。

それと関連して，成人前期の課題である『親密性』も浮上する。「親密性は，意義ある犠牲や妥協を要求することもある具体的な提携関係に自分を投入する能力を指し」（Erikson, E. H., 1982），自己を喪失するという恐れなく，仕事や異性関係の中で他者とオープンで相互に支え合う関係を形成する能力と定義される。事例A，Bにおいては，『親密性』の重要な表れの一面である，夫との関係を問い直すことになる。

結婚は，夫婦関係における『親密性』形成の1つの大きなイベントであるが，ゴールではない。そこから，『親密性』形成がいっそう展開し，成熟へと目指されるのである。殊に，事例A，Bの場合，夫との出会いは肯定的イメージが強く，結婚生活の中で，夫の様々な面を統合して，現実的な夫像に修正し，その上で相互的な関係を作る必要があったと言える。『親密性』の吟味を出会いの当初に十分行わなかったことが，結婚後の失望を大きくさせ，成人後期にも引き続き，この課題に対してさらにコミットすることが，求められたとも考えられよう。特に，成人後期においては，夫との二者関係のみでなく，子どもや年老いた両親，あるいは義父母等の拡大家族との関係の中で，『親密性』が問われてくると思われる。

また，2事例のつまづきの重要な一因として，祖父母の世話という機能を自己内にどう統合するかの問題が挙げられる。自らは子どもを育てつつ，一方で，かつて自分が子どもであったとき養育を担い，現在は年老いた両親の世話をすることは，成人後期の役割の1つである。

ここで重要なことは，実父母との関係を全く切ってしまうことなく，肯定的かかわりをもち続けることが，自らの老いた両親のみでなく，拡大家族における祖父母（義父母）の世話の機能を身につけることに効果的に働くということである。事例A，Bの場合は，実父母とのかかわりが疎遠になっており，義父母との関係も円滑でなかった。このことが，2事例のストレスに大きく関与している。

祖父母の世話に関連して，自らの両親との関係も見直されることになり，時間的に交差しながら，いくつかの作業を並行して行う。すなわち，親子間でお互いの機能が，発達に伴って変わってきた現在において，老いた両親とどのような新しい関係を作るのか。世話をする―世話をされるという立場が逆転した現在に，それぞれの役割をどう受け入れるのか。また，乳幼児期にさかのぼって，両親との関係に思いをめぐらせて，葛藤がある場合には1つの解決を出そうとする。

このように，成人後期には心理社会的発達の課題と危機である，『生殖性 対 停滞』を中核としながら，成人前期の『親密性 対 孤立』への取り組みも同時に行われる。しかも，そのあり方は成人前期とは異なる。成人後期における『親密性』は，自ら子どもを養育し，年老いた両親や義父母の世話をする役割を身につけつつ，子どもや祖父母との関係形成をしながら，夫との関係を問い直して，そこに醸成することが求められる。すなわち，成人後期の発達課題である『生殖性』とクロスして，立ち表れるのである。

一方で，青年期における自己の確立，特に女性としての自己の再検討もクローズ・アップされるのである。さらに，乳幼児期の自己や両親との関係を繰り返し吟味することになる。それは，来るべき老年期において，死を前にして人生全体を振り返り，人生を受容・統合していく，プレ・ステージであるとも捉えられよう。

ロールシャッハ・テストにおいては，成人後期の重層的発達の視点から，対象関係あるいは，“生み育てること”と女性性の様態及び，そのプロセスについて明確に把握することができた。病理的な視点のみでなく，発達課題という視点からも見ることが可能であり，有益な試みであったと言えよう。

不適応状態を示した今回のような事例は，早期の発達段階に固着が認められる（事例A，Bで比較すると，事例Aがより発達早期でのつまづきと言える）。また，それが青年期に再燃し，青年期でも十分に解決され得なかったことが，成人前期を経て，成人後期にいっそう持ち越されると考えられる。そのため，成人後期における『生殖性 対 停滞』を中核として，それに伴って活性化される課題も多様になると思われる。また，個人間あるいは個人内での世代における，自己や役割の調整もより緊張を伴うのであろう。

今回は，2事例の共通点を中心に検討したが，それぞれの不安には相違があり，それは結婚前の職業へのコミットへのあり方等とも関連すると思われる。事例Aは，20歳代で職業へのコミットが強く，退職は不本意なものであった。結婚後も，再就職を願っており，子育てよりも仕事を志向している。事例Bは，職業に従事しつつも，職業人としての葛藤を抱えていたため，結婚に際して仕事への執着は見られない。従って，基本的に結婚前の職業へのコミットのあり方は，事例Bより事例Aの方が強いと言える。事例Aでは，子育てと仕事の間の葛藤が大きく，それが成人後期の不安にもかなり影響している。

『生殖性』に関して，2事例のその後の発達はどのようであっただろうか。仕事に思いを残して家庭に入った事例Aは，子育てよりも仕事や趣味の領域で，達成を目指していくのであろうか。事例Bは子育てにコミットし，家族内での役割と自己の位置づけを見出していくのだろうか。2事例ともそれぞれの理由で中断事例であるため，その後の状況はつかめていない。しかし，どちらも不適応状態にありながら，症状を通して中年期の危機に対処しようとしている，その途上と考えられる。発達の「同調的な（シントニックな）傾向」（Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q., 1986）への展開を願いたいものである。

Levinson, D. J.（1978）が詳述しているように，成人後期においても様々な時期がある。今後は成人後期を細密に分析するとともに，青年期，成人前期から成人後期へ，さらに老年期に至る発達を視野に入れることが求められる。また，多様なライフ・コースに添って，女性特有の発達プロセスをきめ細かに検討する必要があると考えられる。

［付　記］

2事例は，以下で発表したものをまとめ直し，考察を加筆・修正したものである。

事例Aは，名古屋ロールシャッハ研究会（1993）で発表した事例である。当日，コメンターである服部孝子先生（成精会刈谷病院）をはじめ，フロアーからも村上英治先生（椙山女学園大学）のほか，多くの先生方に有益なご示唆をいただいた。

また，事例Bは，名古屋心理臨床セミナー（1992）で発表した事例である。空井健三先生（中京大学）から貴重なコメントをいただくとともに，大学院生の方々からも活発なご指摘をいただいた。ここに記して，感謝の念を表します。

なお，最後になりましたが，両事例の主治医の先生方，及び私が事例を担当する際に見守ってくださった臨床心理士の先生方に，厚くお礼を申し上げます。

文　　献

馬場礼子他　1983　境界例――ロールシャッハテストと精神療法――，岩崎学術出版社

Bellak, L., Hurvich, M. & Gediman, H. K. 1973 Ego Function in Schizoprenics, Neurotics, and Normals: Systematic Study of Conceptual, Diagnostic and Therapeutic Aspects. New York: John Wiley & Sons.

Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. In R. S. Eissler & H. Hartmann (Eds.) The Psychoanalytic Study of Child. New York: International University Press, 22, 162-186.

Brandt, D. E. 1977 Separation and identity in adolescence: Erikson and Mahler some similarities. Comtemporary Psychoanalysis, 13, 507-518.

Erikson, E. H. 1950 Childhood and Society. New York: W. W. Norton & Company.（仁科弥生訳 1977, 1980　幼児期と社会1，2　みすず書房）.

Erikson, E. H. 1982 The Life Cycle Completed ―A Review― New York : W. W. Norton & Company.（村瀬孝雄・近藤邦夫訳　1989　ライフサイクル，その完結，みすず書房）.

Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q.

1986 Vital involvement in old age. New York: W. W. Norton & Company.（朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 老年期 ―生き生きしたかかわりあい―，みすず書房）.

堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の変化―専業主婦，看護婦，小・中学校教師の比較―，教育心理学研究，41，11－21.

Jung, C. G. 1960 The Stages of Life. The Structure and Dynamics of The Psyche. Collected Works, 8. New York: Pantheon Books Inc.

片口安史 1974 新・心理診断法，金子書房.

川畑直人 1992 行動化様態の異なる窃盗非行少年の自我機能評価―ロールシャッハ・テストを用いた2事例比較―，京都大学教育学部紀要XXXⅧ，170-188.

河合隼雄他 1983 精神の科学6―ライフサイクル―，岩崎学術出版社

Klopfer, B. & Davidson, H. H. 1962 The Rorschach Technique ― An Introductory Manual ―, Harcourt: Brace & World Inc.（河合隼雄訳 1964 ロールシャッハ・テクニック入門，ダイヤモンド社）

Levinson, D. J. 1978 The seasons of a man's life. New York: Alfred A. Knopf.（南博訳 1980 人生の四季 ―中年をいかに生きるか―，講談社）.

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 The Psychological Birth of the Human Infant. ― Symbiosis and Individuation ―. New York: Basic Books.（高橋雅士他訳 1981 乳幼児の心理的誕生，黎明書房）.

名古屋ロールシャッハ研究会 1990 ロールシャッハ法解説・名古屋大学式技法，名古屋大学医学部精神医学教室（非公刊）.

Neumann, E. 1953 Zur Psychologie des Weiblichen. Zurich: Rascher & Cie.（松代洋一訳 1980 女性の深層，紀伊國屋書店）.

Neumann, E. 1956 Amor and Psyche. ― The Psychic Development of the Famine: A Commentary on the Tale by Apuleius ―. Zurich: Routledge and Kegan Paul, Ltd.（河合隼雄監修 玉谷直實他訳 1973 アモールとプシケー，紀伊國屋書店）.

Newman, B. M. & Newman, P. R. 1984 Development Through Life. ― A Psychosocial Approach ―. Third Edition, Richard D. IRWIN. INC.（福富護訳 1988 生涯発達心理学―エリクソンによる人間の一生とその可能性―，川島書店）.

岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究，教育心理学研究，33，295-306.

齋藤久美子 1990 自我とパーソナリティ理解，小川捷之他編 臨床心理学体系2，パーソナリティ，108-150，金子書房.

Schachtel, E. G. 1966 Experimental Foundation of Rorschach's Test. New York: Basic Books.（空井健三他訳 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎，みすず書房）.

田畑 治 1985 児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴，名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科―，32，105－120.

田畑 治 1988 中年期に子ども喪失体験をもつ婦人のカウンセリングの特徴，名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科―，35，97－109.

鑪幹八郎 1986 エリクソン，E. H.，村井潤一編 発達の理論をきずく，193 －215，ミネルヴァ書房.

氏原 寛・東山紘久・川上範夫 1992 中年期のこころ ―その心理的危機を考える―，培風館.

Young-Eisendrath, P. 1984 Hangs And Heroes: A Feminist Approach to Jungian Psychotherapy wish Couples. Toronto, Canada: INNER CITY BOOKS.（村本詔司・織田元子訳 1987 夫婦カウンセリング ―女が真に求めるものは何か―，創元社）.

（1993年8月25日 受稿）

原　　著

ABSTRACT

Development of Middle-Aged Women and the Rorschach Analysis
— Examination of Two Cases Expressed Anxiety —

Kazumi HOSHINO

In this study, the developmental processes from infancy to adulthood of two middle-aged women were examined from the viewpoint of Erikson, E. H. (1950)'s psychosocial development, and they were analysed by the Rorschach Test. Both cases were ① committed to working in twenties, ② marriaged about thirty, ③ retired on the opportunity of the marriage and/or the birth, ④ complained of anxiety in adulthood.

"Generativity vs. Stagnation" is the task and the crisis of psychosocial development in adulthood. Although this is the main task in this stage, they worked on the task of "Intimacy vs. Isolation" in young adulthood together. Formation of the self in adolescence and especially maturity of the self as a female were also examined in adulthood. And relationships between the self and parents in infancy were inquired repeatedly.

These cases with problems of adaptation were found each fixtations in the early developmental stage. Therefore they had the same kind of problems in adolescence again. And in adulthood they face the task of adolescence have not resolved and the task of young adulthood.

By the Rorschach Test their object relationships and the processes of the female self could be clear. The Rorschach Test was able to analyze not only from the psychopathological viewpoint but also from the developmental viewpoint.